

# Active Learning (アクティブ ラーニング) 実施報告

本年度の「研究開発実施計画書」〈3 研究開発の概要〉においても、「Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力を育む取り組みを高大連携して行う。」と謳っている。

具体的には、〈高大連携で授業改善 — 友と協力し自ら学ぶ Active Learning〉を強力に展開することを目指し、本年度も以下のように取り組んだ。

以下、本年度の Active Learning 実施に関わる取り組みを記す。

## 1. アクティブラーニング研修

創価大学教育学部関田一彦教授と提携し全教科での導入を目指し、研修を行った。関田一彦教授には、SGH アドバイザーという立場から、アクティブラーニングや最新の教育界に関わる情報提供等、さまざまなアドバイスをいただいた。

「環境・開発・人権・平和」の4テーマを教科指導に取り込む工夫も含め、本校のSGH活動の根幹となるGRITで生かすため、本年もアクティブラーニング研修を校内で2回実施した。

### アクティブラーニング研修 (第1回目)

日時 2016年3月24日(木) 10:00~12:00/13:00~15:30

会場 本校 展開教室A

対象 高等学校全教員

講師 関田一彦 創価大学教育学部教授

内容 さまざまなアクティブラーニング手法の紹介

教員自身のアクティブラーニング体験/ワークショップ

### アクティブラーニング研修 (第2回目)

日時 2016年7月25日(月) 13:00~16:00

会場 本校 展開教室A

対象 高等学校全教員

講師 水野 正朗 教諭(名古屋市内の公立高校国語科教員)

関田一彦 創価大学教育学部教授

内容 第一部 水野 先生のアクティブラーニング ワークショップ(国語の授業)

第二部 関田 先生によるレクチャー

## 2. GRIT

土曜日の総合学習をGRITと呼び、探究型の授業を展開した。「環境・開発・人権・平和」の4テーマで、生徒間での討論、テーマを掘り下げるリサーチ、問題解決に向けての考察を行い、最終的に2月中旬に開催した公開授業でグループごとのプレゼンテーションを行った。

関田教授より紹介されたアクティブラーニングの手法をはじめ、教員が各所で学んだ手法を取り入れ、より活発な議論、深い学び、さらに主体的な取り組みができるよう、さまざまな工夫を行った。

### 3. 各教員による Active Learning 実施報告

【授業者】片桐麻衣 【科目】化学 【対象学年】3年 創大文系／創大理系

#### ◇実践内容

(創大文系) 2015年度3学期は、ほとんど全ての授業をアクティブラーニングで実施しました。生徒4人グループで、教科書の範囲を振り分け、生徒が授業を行い、教師は一切授業を行わないというスタイルで実施しました。

2学期期末テスト後に生徒4人程度のグループを作り、担当範囲を決めました。そしてルーブリックを明示した上で、冬休みの宿題は、担当範囲を調べるというものにしました。冬休み前に全員がGoogleクラスルームに登録し、宿題の提出・授業計画シート・振り返りシートの提出を、Googleクラスルーム上で行いました。

テスト前に生徒の質問が多く、私自身が対応できていませんでしたが、各クラスに、それぞれの分野のエキスパートが誕生したおかげで、質問の数が減り、皆で教えあう光景をみるようになりました。

また、化学が苦手だった生徒も、「やればわかる」ということを掴んだ生徒もおり、アクティブラーニングを計画するのは大変でしたが、「自主的に学ぶ生徒を増やしたい」という当初の目標を達成することができました。

今後は、ICTの活用を見据えて、さらに研究を進め、実践していきたいと考えています。

(創大理系) 2016年度1学期には、グループごとに問題を作成し、解説も考えようというアクティブラーニングを行い、実際に定期考査で出題しました。

また、理系の授業では3単位というメリットを生かし、問題演習を多く取り入れ、問題演習時にアクティブラーニングで教え合いをし、その後、ジグソーで教え合うという実践をしてきました。

ジグソー法を取り入れたため、責任感が生まれ、グループで教えあう際に、一人一人が主体的に学び合う姿が多くなりました。また、まず自ら調べて考えてみようという意識が向上したように思います。グループでの教え合いは生徒が目標を明確にして取り組めるように、次の展開を見据えた目標やプランを明確に示すように心掛けました。

今後は、ICTの活用を見据えて、さらに研究を進め、実践していきたいと考えています。

【授業者】中村猛 【科目】現代文演習／現代文B／古典B  
【対象学年】3年 創大文系／受験文系／創大理系

#### ◇実践内容

解答や、解答の根拠を検討させたり、音読をさせたりということを、グループで行いました。

グループの人数は3~4人、または、ペアで行いました。” 授業が活気づくとともに、考えをぶつけ合う姿が見られ、思考している様子が窺えました。

グループの人数は3~4人だと活気づくと共に、私語も増えました。よって、ペアのほうがより効果があるように感じました。

【授業者】山中 広一 【科目】英語 【対象学年】3年 受験文系

#### ◇実践内容

ペアワークやグループワークを英文の訳読に取り入れました。またスピーキング力をあげるために、ペアワークを多く取り入れました。

センター試験のリスニングのスコア平均が上がりました。 目的を持って取り組みたいと思います。

【授業者】小山 弘 【科目】保健 【対象学年】2年 創大文系

#### ◇実践内容

グーグルクラスルームを使用し、班ごとに研究課題を与え、その内容を班員でグーグルスライドでプレゼンテーションを行う。ICTを活用し、クラウド上での協働作業を行った。毎回の調べ学習やプレゼ

ンの態度はルーブリックを利用し、あらかじめ決められた基準でお互いを評価し、点数化して毎時間グループクラスルームで提出させた。ノート提出に関しても、クラスルームを使用し、その日のプレゼン内容を教科書に書き込ませたものを写真で撮らせて、毎時間後に提出させた。

グループ全員で一つの同じスライドを同時に作業する中で、探究の仕方や、発表の仕方をお互いに共有・議論しながら進める姿が見られた。誰一人としてふざけたり、孤立する生徒がなく、集中して行うことができた。また、ICTに詳しい生徒やプレゼン方法に詳しい生徒がグループを超えて教える姿も見え、知識の拡散が見られた。

教師個人の研鑽と努力で行う授業とは違い、教師自身も気づかなかった視点での授業の展開や、斬新なプレゼンシートの作成など新しい発見がたくさんあった。しかし、円滑に授業を行うためには、グループクラスルームの作成やチェックシートの作成、課題の配信やルーブリック表の作成や配信など、授業までの準備や授業後の提出物のチェックなど教師自身が教科内容以外の取り組みに時間がかかることがわかった。逆に授業中はファシリテーターやコメンテーターなので非常に余裕ができた。

【授業者】相川 茂樹 【科目】保健 【対象学年】2年 創大文系

#### ◇実践内容

タブレットを使用して、スライドを作成させ、班毎に模擬授業を行わせた。

GRITに似た探求型の授業となり、主体的に学ぶ事を狙いに実践させた。

3時間の授業作成時間→3時間での各班の模擬授業（2班/時間）で実施。

他の班が発表している際は、メモをとらせると共に、発表態度、内容、スライドの内容について生徒が発表者に対して、評価をつける、ルーブリック評価制度も取り入れた。

タブレット全員配布が実現した高校2年生だからこそできた取り組み。

- ・主体的に学ぶ事によって、他人との関わり、意見交換が増えた。
- ・生徒が生徒を評価するルーブリック評価制度を設けた事により、寝ている生徒、他事を行う生徒がいなくなった。
- ・積極的に質問にくる生徒、授業以外で質問をしに来る生徒も増えた。
- ・授業以外の話をしている生徒がいなくなった。
- ・欠席している生徒のフォローが難しくなっていく。（生徒が自主的に取り組む為に、生徒間での知識量に大幅な差が出てしまうのではないかという懸念が生じた）
- ・正しいアクティブラーニング、理想のアクティブラーニングについて、教師自身ももっともっと学んでいく必要があるし、学びたいと感じた。
- ・Googleの利便性を大いに感じた。”

【授業者】貴志福太 【科目】国語 【対象学年】1年

#### ◇実践内容

新しい教材の最初の時間に読みの確定、課題ノート予習部分を4..5人のグループで行い、問題課題はグループ内で解決させる。解決できない事には教師が解答に至る情報の入手の仕方等アドバイス、または、解答を示す。

段落要約をグループで作成し発表させる。グループ内ではまず個人が作成、評価し合って最適なものを決める若しくはそれを叩き台にして推敲して発表する。

授業への参加度合がたかまった。

学習内容によっては効果的だが何でもかんでも金科玉条のごときものでもない。精査して授業案を作らないと弊害多い。国語科は明治の世から一対生徒数のアクティブ Learning を追求しています、今さら何を…という感がします。

【授業者】堀 光則 【科目】数学Ⅱ 数学B 【対象学年】2年 創大理系

#### ◇実践内容

前回の内容をお互いに説明させています（ペアワーク）。

授業の導入がスムーズになりました。

【授業者】千葉一夫 【科目】世界史 A 【対象学年】2年 創大理系／受験理系

◇実践内容

(創大理系) 四大文明をグループごとにシートを作成。グループ代表者によるプレゼン。コラボレーション力を発揮できた。生徒間の話し合いにより意見の違い等が明確になり、今までより他の文明との比較ができた。

タブレットを使った調べ学習をさらに学び合いの授業に展開できるように模索しています。

(受験理系) 四大文明をグループごと シートを作成し グループ代表にプレゼンしてもらう。個人差はあるが概ね、協力してプレゼンに取り組んでいた。センター受験が目的であり(理系にとって二次試験に科目設定のない)地歴公民は広く浅く網羅的に基礎知識を習得しなければならない。従来知識偏重の授業形態を現時点で変化させる前に、板書・ノート・プリント・暗記が学びと思っている生徒の意識変革が重要。自ら考えて、課題をつくることにはかなり労力があるし、基礎的な学力は必須。タブレットを使って、受動性・依存性をポジティブ・アクティブに変革できるか 明年度のテーマとしたい。

【授業者】上田 幸太 【科目】生物基礎 【対象学年】1年

◇実践内容

- ①毎回の授業の冒頭で前回の授業の復習を1~2分で行う(隣同士で説明しあう)
- ②フィールドワークや実験
- ③授業内容を説明する動画の作成

◇効果

- ①3学期からの取り組みなのでまだわかりません
- ②自然現象や環境などを実際に五感を使って体験し、理科を身近な存在と感じられた
- ③人に説明しなければならないのでグループ同士の教えあいが自然と生じた。また、同じ内容に繰り返し触れることになるので定着も深まりました。

アクティブラーニングと一言に言っても教科特性が大きく出ると思います。

ルール作りや意義付けなどは全体の教員研修などでできるかもしれませんが、研修をする際は全体研修ではなく、教科ごとの研修にすべきかと思います。

【授業者】寺西 翔大 【科目】数学 【対象学年】1年

◇実践内容

練習問題を解く際にグループワークでの教え合いを推進した。早くできた生徒に教え隊や丸付け隊といった役目を与え、生徒同士の交流を授業の中でつくった。

授業中寝ている生徒の減少。グループワークへの抵抗感の減少。

【授業者】佐藤 進 【科目】現代文 【対象学年】2年 受験理系／受験文系

◇実践内容

- タブレットを使った誤答分析
- 受け身の授業から能動の授業へ

【授業者】山並哲也 【科目】日本史・倫理 【対象学年】3年 受験文系

◇実践内容

共同学習し、プリントへの解答を記入。その後、生徒達が板書を行う。

生徒の活動が活発化することにより、授業が活性化する。

アクティブラーニングと進度の確保の両立をどのようにやっていくかが、自身の課題です。受験科目に選択している生徒にとってみれば、2学期までに、教科書の大部分を終わらせることが重要。もっと早く進むべきという意見もあれば、もっと色んな取り組みをしたいという意見もある。受験クラスですので、選択者の意見を採用していますが。

【授業者】池田 勝利 【科目】物理 【対象学年】3年 創大理系

◇実践内容

2学期中間考査終了後から3学期にかけて、2人1組による10回連続の生徒実験（1実験に2～3コマの授業を充当）を行っています。

物理教室への移動が速やかになり、チャイムが鳴る前から準備や実験に取り組むようになった。

実験機材の扱い方、データ処理の仕方、レポートの書き方など、大学進学後に必要な技能について習熟が進み、OJT的な取り組みともなっている。

【授業者】西田修英 【科目】書道、国語 【対象学年】2年 創大文系

◇実践内容

実技、芸術鑑賞ディスカッション。  
深みを知ることができる。

【授業者】清水田 孝史 【科目】数学 【対象学年】2年 受験理系

◇実践内容

演習問題の解説を生徒に行わせ、質疑も生徒を中心に行った。  
ペアワーク等、積極的に取り入れるなか、教え合いの雰囲気をつくるように努力した。  
生徒同士で教え合うことが増えた。  
ICTを活用することで、できることの幅は広がります。今後は楽しみです。”

【授業者】小西弘子 【科目】理科 【対象学年】1年

◇実践内容

生徒が教え合って互いに理解を深めることができた。

【授業者】落合聡 【科目】日本史／政経 【対象学年】3年 創大文系

◇実践内容

書き込みプリントを用意しての調べ学習→班で問題作成→問題を交換して解答を書く 寝ているメンバーはいなくなった。

寝ているメンバーは減り、50分間の生徒活動は行われているのですが、それがアクティブ（能動的・主体的・積極的）なのか、心の中はわからない。体は動いているがパッシブ（受動的・消極的）なのではないかと危惧している。よって、私のしているのは、アクティブラーニングではないと感じている。

【授業者】森田尚子 【科目】家庭基礎 【対象学年】2年 創大文系

◇実践内容

ペア活動、少人数での発表、3人組即興ディベート、グループ活動（調理実習など）  
個人活動がわかりやすい。グループ内での人間関係がよくなる。  
時間内での達成度と個人活動の評価の問題。

【授業者】 福田 淳 【科目】英語 【対象学年】3年 創大文系

◇実践内容

グループに分かれて、ディスカッション 片言ではありますが、人見知りせずに英語を話せるようになった。  
レベルの高い生徒は、低きに流れないようにと注意してきました。

【授業者】中前 弘 【科目】英語 【対象学年】1年

#### ◇実践内容

- ペアワーク・グループワークを多く取り入れました。
- 特に授業をオールイングリッシュで行うことにこだわりを持っていたので、日本語を確認しなければならないところや、意味を確認すべきところなどでは、短時間の生徒同士での確認・教えあいを積極的に取り入れました。
- ライティングの授業ではピア・チェックも取り入れました。
- ブレインストーミングを各自でした後、グループやペアで共有などもよくさせました。
- リーディングではテキストの本文が4つのパートに分かれているため、それぞれの生徒にパートの担当を持たせてその範囲を同じパート内の生徒で調べ理解させた後、別のパートの生徒とごちゃ混ぜグループを作って、内容を共有し教えあうというジグソー法も実践しました。

私が1年目ですのでこれまでの生徒との変化を論じるのは難しいのですが、他者と協力してアイデアや意見を出し合うことが非常にスムーズにできているように感じます。(グループによる差はありますが)

また、授業中に寝たりうとうとしたりという生徒は非常に少ないです。

自身のアクティブラーニング実践がグループワークありきになってしまったようにも感じるので、アクティブラーニングを柔軟に考え、工夫していきたいと思っています。